

れたる人子は、否だみてこそ物はいひけれとあるなどをおもへば昔も今もしかるにぞ有ける、
〔倭訓栞中編十三〕たみ。源氏に詞だみてと見ゆ、なまれる意也、後漢書の點本に、迂字をだみたり
とよめり、俗にどみといふにかよへり、

〔拾遺和歌集物名〕したみ

よみ人しらす

あづまにてやしなはれたる人の子はしたみてこそ物はいひけれ

〔源氏物語五東屋〕わからよりさるあづまの方のはるかなるせかいにうづもれて、としへければに
やこゑなどほどくうちゆがみぬべくものうちいふすこしだみたるやうにて○下

〔伊呂波字類抄疊字〕談論 談咲 談話 談數

〔書言字考節用集八言辭〕談話

〔運歩色葉集多對談〕對話

〔類聚名義抄五謂言〕謂音胃

〔伊呂波字類抄加人事〕語

〔議謂詖〕詞 誓 謾 読 言 詰 謙 辛 辞 白 謂已上同

〔日本書紀雄略十四〕九年三月、大伴談連、談此云

〔倭訓栞前編六〕かたる 日本書紀に謂又語をよめり、言語によりて、其象あらはる、をもていふ成

べし、

〔新撰字鏡言詶〕乃咸反、平、詰々細意也、

〔藻鹽草入事〕語

阿豆万利氏語事、

かたることのは かたりつくす 昔語 よ語○中

いにしへ語 思ひこしかた 行さきを

かたることのは かたりあらはすことのは ふることを語つべけて○